

Saint-Saëns : "Le Cygne"

Andantino grazioso

Violoncello solo

上の例は、おもにA弦の幅広い音域で歌われる、この楽器のための名旋律の一つである。

《ウルフ音 (Wolfy note) について》

Violoncelloには「ウルフ音 (Wolfy note)」と呼ばれる、極めて音質の悪い音がある。G弦の7度上のf音付近の音は、奏者が弾くと一種異様な共鳴が起きる。G弦上だけでなく、D弦で弾いても同じ現象が起こる。

この音域は、ちょうど弦の発振周波数と共鳴胴の最低共振周波数が一致する音域であり、第9章《共鳴胴の音響現象》で述べた、共鳴胴の固有振動数との「共鳴」が起きるわけである。そうなると、この現象は擦弦楽器全般に起こりうると考えられるが、Violin, Violaでは影響は少なく、特にVioloncelloにおいて顕著である。

またこの現象は楽器の善し悪しにはあまり関係なく、よく鳴る名器ほど発生するとも言われる。これを防ぐため、奏者は「ウルフキラー (Wolfy killer)」と呼ばれる器具を楽器に付けることもある。

《運指法の比較》

第9章《運指法》の譜表でも示したが、Violoncelloの運指は楽器の大きさの関係でViolinやViolaとはかなり異なる。特に低いPositionでは、指幅が一定であるのに弦長が長いため、全音階的運指法はViolinやViolaのように一定ではない。

1 (人差指) 2 (中指) 3 (薬指) 4 (小指) で表す

	全音階的運指法	半音階的運指法
ViolinとViola	1-2-3-4	1-1-2-2-3-3-4-4
Violoncello	(0)-1-2-3, または(0)-1-3-4,	(0)-1-2-3-1-2-3

高いPositionでは規則的な運指となる。Violoncelloのこの音域ではさらにThumb-Positionという独特の技巧も加わる。Thumb-Positionとは名前の通り、他の擦弦楽器では使わない、親指が参加する運指法である。指板の幅が広がる高いPositionなら、親指でも弦を押さえることができる。しかし低いPositionでは、もちろんこの技巧は使えない。

【Violoncelloのさまざまな奏法】

Violoncelloは、ViolinやViolaよりはるかに大きいのが、基本的に同様の奏法が可能である。ただし楽器と弓の向きが、ちょうどViolinと反対になるので、弓の ▽ (down) と ∨ (up) の動きも反対になる

《Arcoの奏法》

弓を一音ごと返すD師ach、Martellato、Arrach 奏法や、ひと弓でいくつかの音をだすLegato、Spiccato、Arpeggio奏法などViolinと同じようにできるが、ArpeggioではViolinのArpeggio音型と弓の方向は逆になる。

次の例をよく見てほしい。第10章《Arcoの奏法》で例に上げたPaganiniの場合と、Arpeggio音型の向きは反対になっているが、演奏の弦・弓の方向関係は同じなのである。

Kodály : Sonata for Violoncello solo

なお上例の楽器のG、C二弦は、通常より半音低いFis、Hに調弦するよう指定されている。低音域を拡大するため時折おこなわれる、このような特殊な調弦を、Scordatura（スコルダトゥーラ）と呼ぶ。

重音奏法では、Thumb Positionによって、8度の重弦（オクターブ奏法）も可能である。三重音以上では、弓のコントロールはViolinと逆方向になる。

《Pizzicatoの奏法》

Pizzicatoは、ViolinやViolaより余韻が長く、ずっと良い効果が期待できる。

また弦をかき鳴らすようなPizz.の往復運動は、ViolinやViolaの場合、人差し指のみで（□ V □ V...）奏するが、Violoncelloでは上向は親指、下向は人差し指を使うので、効果もよく容易である。

《Harmonicsの奏法》

Violin同様、自然ハーモニックス、技巧ハーモニックスとも使われる。効果も良い。（自然）ハーモニックスのArpeggioや、Harmonicsの重奏などもできる。

【バロック楽器と現代楽器の相違】

Violinと同様ピッチの違いがあるほか、エンド・ピンの有無の問題がある。バロック楽器はエンド・ピンがなく、両脚で挟んで支えられていた。

13 擦弦楽器～Violoncello

また弓も Violinと同様、その張力、木製棹の太さなど、現代のものとは少なからず異なったという。